2022 年度研究事業報告会＃１　発表概要　　2023 年 6 月 24 日（土）13:30 より開催

近代的な個の輪郭をほどく演技体
－『ab さんご』を経由して、劇作論をしたためる－
（研究代表者＝西尾佳織、リサーチ支援型公募研究）

黒田夏子の小説『ab さんご』の特異な文体を演劇として上演すべく、三浦雨林、和田ながら、蜂巣ももの三人の演出家がそれぞれ活動した。その試行錯誤に西尾佳織（研究代表者）が立ち会い、創作現場で起こっていたことを観察・記述しながら劇作論を執筆。『ab さんご』では、固有名詞を一切使われておらず、主語が極力排されているように、名詞ではなく動詞中心に文章が編まれており、出来事や関係性の側から物語が記述されている。そうしたテキストが要請する演技体、動詞の集積を物語として提示する物語について探求した。

「明日の寓話」プロジェクト
－人間と非人間の新しいナラティブの創作に向けて
（研究代表者＝佐藤朋子、リサーチ支援型公募研究）

人間の作った既存の物語と人間以外の視点を複合的に組み合わせ、新しいナラティブ・シリーズを創作するためのリサーチ。「明日の寓話」とは、1962 年にレイチェル・カーソンが『沈黙の春』のはじめに掲載した、生き物がいなくなった静寂をかかえる架空の町についての寓話である。人間と非人間の関係についてのフィールドワーク、各分野の研究者や実践者との対話やインタビュー、物語研究を通して、新たな物語の創作、レクチャーパフォーマンス上演への接続を図った。

ゲストトークの様子

「インスタレーション／パフォーマンス」における身体と空間
（研究代表者＝楊いくみ、リサーチ支援型公募研究）

「パフォーマンス／インスタレーション」という形式における身体表現の幅を模索し、2022 年、行われた各地の芸術祭やホワイトキューブでのパフォーマンス鑑賞を対象とする、国際的リサーチを実施した。身体表現の鑑賞では、受容者の移動が可能であることにより、ブラックボックスで行われる表現とその受容のありかたが異なる。そこに生じている感覚、認識、技術をまとめた上で、今後どのような表現が起こる可能性があるのか、実践的に考察した。

アフォーダンス・コレオグラフィ 誘導の振付
（研究代表者＝ハラサオリ、劇場実験型公募研究）

環境と身体をテーマとして制作・発表を行ってきたダンスアーティストのハラサオリ（研究代表者）と、コンセプトベースで照明を扱う照明家の筆谷亮也（研究分担者）らが協働し、知覚と認知の視点から振付・演出の方法論を探った。特定の身体行為と、それを誘発する環境との関係を指す生態認知学の知見（アフォーダンス理論）を参照し、劇場機構を活かして 7 日間の劇場実験を実施。アドバイザーに、生態心理学者の佐々木正人氏を迎え、研究成果をクローズドショーイングにて共有した。

撮影：井上嘉和